



芭
蕉
集
卷
之
一



蕉翁發句說叢大全卷第二

葛飭

素丸著述

同

南臺檢校

春部下

八九間、空よ雨少る 柳、のれ

袋

云此句ハ柳の系ハ風ノ靡キニあつたりは八九間を以て

系ハ降ノ後極シ又也

林

云此句ハ雨少るや春のこころ清て

時く日の陰りハ出た柳の系乃静さいハ九間も亦ハ雨の降
心比しそ何れか景曲のそとハ春の感僧の暮りて此句は

去来曰予は句の意味を云ふは只眼前の目此語乃ち予の
わらりと桐系風情しとありて答へりし其語ハ梅柳ハハ
九間とらてるも詩人の常しとて九間といふも一う息
す此へのしきり予不考ありて予は然り尋 **解** 此句を出し

説

袋

林

解

予不考ありて予は然り尋 **解** 此句を出し
足多ぬる魚方多のりて記さる却て中へは客僧の妄説を
堪笑たり本據をさすべし予人の句ハ評しがれ此の況
や蘇の句さるや河原上梅柳のハ九間去しるもあや
出たてりて予は世俗の談さる也此句古人の説とあり
今奉て初輩のふに記す○去来抄曰素行曰此句ハせうと

二

ハハ初りぬ落示たりとて西華坊曰此句ハ物語あり
去来曰我もわら坊曰吾先あり木曾塚乃舊草にわらて
或人卅句を問曰足雜一此柳ハ白壁の土流此方此松皮膏乃
そりより中校しわら此はハ九間もせられけり
て春和の語家やぬききりしとてこれ翁ハ障子の
さしよりこゑをえおろしてはりや丈佛のわらりあは
依柳を又さる柳とすりし續猿蓑よ妻乃鳥の畠柳
を声とす柳うて春和の語さやぬききりしははりて定
て去来曰我もわらの秋つりさるる別墅にかり
て初妻柳の句三つはいつまははらむらむらりてハ九

間の柳さる風情はしりこまはりしこしやうをせよ
 大佛のあはりやうもやけふとや翁ろこありそく教ひ
 如くははは俳諧をえふ事其人の胸中を孝慈とて
 二に念んもけりたりしよちこつアやまりたりし
 名宗高達の人とては能はくけりきあひのしむ人を
 又多其人よ違ふハ馬に多家人とりて念しここの説秘
 花よりとりとも安注は初輩のまよひしりて歌き今
 ともふし初りを念きしりて詩人の法を云賣僧ハ片
 腹つとて事也。○陶淵明が歸田園居詩曰方宅十餘畝草
 屋八九間榆柳蔭後簷桃李羅堂前とかはるりとも

如く又垂りしりまの大佛の柳もけり合されて。最時の
 感偶乃吟しやうめしん唯ハ九間はりのあはれ雨乃
 とりて俳諧の柳を和して事也。○淡斎云雨ハ一
 二たれとてせいのえは物なると春柳の系乃少や八家
 妻而ほそひてそらぬハ八九間のとあはれ。和志うと雨と
 柳とつや。見をりしは後やあはれ。此説も
 持てて幸ふ託と。

鶯を繞りあはるるたを柳

解橋柳と云せとも坂名なきは詩文
 には橋柳と云とも安訓ハ坂名なきは

云莊子夢為胡蝶栩栩然胡蝶也其心也死其死也

乃眠をてく系案一白日み作者皆胡蝶の夢といふはあふ
きと考と轉一々々彼古案少て故事に法る道すとつ

俳諧の莊子歌一 **袋林** 此句や出さ

説 大に非なり是故事につらつと云ふ也此句は一節
有。墻柳あり。胡蝶の夢は白あり。以。眠をてく。早。胡蝶
の夢といふ。故事に法る。奴也。柳の眠をてく。八人柳の古
夏よりい。和平。連俳古今。普遍也。考。此。眠。て。く。何。也。
解。一。は。大。に。た。る。なり。○又。魏。の。移。る。を。い。は。す。
一。お。と。き。い。く。剛也。是。夢。を。た。る。好。め。る。洞。也。正。い。は。す。
る。あ。や。白。選。よ。た。ま。に。移。る。と。何。り。寛。厚。温。和。詞。優。美。

こは殊ならむ。依てたも小眠家を困や。○温叟詩話曰。

不此集中人柳終朝剩得三眠注漢苑有柳如人形魏曰人

柳注一日三起三眠注夫木抄注建長八年百首奇合よとくひこ

そ執も外をれを柳にまきく枝入るやふあはくらし 右近中将具氏
柳の卒

又柳よ鶯のとり合せハ○白氏文集云緑絲柔弱不勝鶯揚

柳風前別有情一日三眠何大懶蘇家小女共知名注世詩

かふつりこ云人も亦案を好むみゆり鶯を深あしとふハ

俳家の活法之殊のり多あり何と云世詩の起句より一轉

一入案の眠をてくは柳よとハ云ハ一はぬまハ氣の句す
なぐ。白氏文集より。ゆかきのみ多し。といはす。別。の。流。

ハキバク〜〜〜

喜城のゆり〜

〜〜〜花〜ゆり〜

林

云白意ハ眼筋ニ平ムカフ〜

〜〜〜

解

〜世詠〜

〜世の〜

〜世の〜

説

林

引音らきりもたえぬ〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

き 鞠しかりぬる

ふのめ

山はくらくらぬく物まづ二川

解

云齊宮の忌詞小佛をかうこし経を漆糸とし寺を瓦膏
ものといふ事なり世細よゆる是れや川一二の藏王堂を
とす

袋林

此句を出さば

説

藏王堂への忌詞もありまづも。齊宮の忌
詞ハ延喜式小るしてこれか。寺を瓦膏ものといふ。少の
りまづ。まづ説をわたり。○延喜式五神祇齋宮式凡忌詞

内七言佛稱中子經稱漆紙塔稱阿良々岐寺稱瓦膏云
るに瓦ふくものといふ家柄を長嘯子の文才と。○奉白身

一家の記長八隠君
所の記者。注所を瓦ふくもの二川。函丈二間をハ

まつてと。云此まの。まづ文章のまづ。源氏物
源氏の中も。竹んまの。おせんといふ。河幽受也。出

代長嘯子の文章すなわ。皆也。菰色は詞をこの。中
うい。のめ。舟あり。一二の堂は。乃か。中より。出

く。え。瓦ふくもの。二川。中より。出
可。芳野山へ。中より。出

ら。一二の堂乃。又。目。中より。出

良福の引用を發し。古き村叟の云。行基の世派斗鳥所山
くしのこと。さうねむをなす。勅うすと云ふ。一

悼 呂 九

當 歸 より 何 ら ぬ 塚 の すゝ 花 草

袋 云是追悼の句。故復を引て表ひ此句をいひ。地國と云
く接ひて故に遠志を送る。是の遠く思ふこと。其の
當 歸 を 送 り 是 乃 當 歸 一 乃 心 之 是 乃 一 乃 當 歸 を 送
るより墳に萱草の咲く。一入表はる。是の遠きより事。
ものくえり。解 云呂九は出羽國羽黒の藤の人也翁の驪尾を付

て一夜武江の深川に飯麻一其は洛乃梅花坊小亭を越し衣更着
此は旅中。あし黄泉の客と句。世向少云。當 歸 の 唐 の 孟 選 の 詩
に 藤 蕪 亦 是 王 孫 草 莫 送 春 香 入 客 衣 藤 蕪 一 名 當 歸 此 一
字 當 歸 と 讀 く 夫 の 後 の 乃 を 考 へ 閨 情 の 詩 に 爰 此 由 來 の 二 字
そは插さぬ。又楚辞九歌曰。悲莫悲兮生別離。樂莫樂兮
新相知。心を結して當 歸 の 名 是 送 悲 乃 生 別 離 死 別 離
夫れも表し。云向言。董仲の塚に住く。云を考へる。

林 此句は出づ

説 袋 當 歸 遠 志 の 出 不 心 此 乃 別 離 之 在 面 也 是 乃 一 乃 當 歸 を 送
る。云。此句は呂九をいひ。向言。其を考へる。可憐

用事の和弁此風歎。俳諧の成りて却て。必希しと云ふ事
 ○白氏長慶集云。古墓何代人。不知姓與名。化為路傍土。
 年々春艸生。是らの侍より案じ。神傳句也。○句意の出羽
 の島司呂丸。旅中にあづきて。終る一塚のりた。侍人なる
 ぬ。近き所も何ら。坊て遠き境に乃人あわ。當歸の石
 色。今や空しく。董のこ生ひて。墓のりたに。すむ人とあわり。こ
 原に古石をあらし。水流くはうひこあも。名人のまはれ。
 故口の人くらと。や遠志のふげ。こひや。侍もあ。是で余情
 川春を何れの人と惜しげ侍

袋 云此句表ひき春を近江の人と云ふ句で惜しむるやに云ひ
 かゝりいと顯く湖水眺むと何れと武藏所を如く思ふ
 此夷江忍く通りての句に去るは此を東都とあはれ夷江と云
 ひしの人と惜しむるこゝろに近江はまゝと近江の人と俱く悲を
 惜しよ作也。句面白切字又了大槪ハ大廻りかゝる格乃
 やりあれも句中小慥なる切而何れ教奇人のこゝろにりて略と
林 云費之奇しく又もまじりておとまりとあのみまぬ我乃あり
 ば惜きまうわが侍あしやまをいひよあふも乃句はまじ也。可
 考しるや **解** 云翁石山寺の奥幻住菴に在る此とこの門人
 等と春を惜むる湖水の眺むしは句を惜しむると云ふ侍集阿

已一句の情々るといふ事なりと立候云

〔説〕

〔集〕

〔林〕

注一向なる事なり。兒童のもののよぶ如し。川句似ても
奇くは。古来より。三月其詩歌を引合さんといづれの詩句
とんも。春を惜まぬやいある。翁の句に。古乎をいひむい
と。あつち海に。ことし。解 幻住菴少の吟と。海に。あつち

廉棠也。木曾塚の菴。うんの吟に疑ひなり。左記を○ 春来

抄曰春を惜まぬ者なり。先師（そオの證）湖南におりし川集を近江の

人と惜まけんと云。句法大津の尚白。海に川集をあつちの人とい

くんも川集と丹波の人といんも同一事なり。ゆいハ一句より

已えり。とす。去来汝いふ事。作らる。尚白の言より

す近江の人と惜まけり。海に勝勝なるがや。の恒かあつち

ら。普集り。丹波。と。わたり。と。川集向う。あつち。一

春又近江よ。あつち。と。川集。と。風流。と。あつち。の。川

其場。と。あつち。と。川集。と。去来。汝。いふ。事。を。知。る。事。也。と。云。○ 支

と感賞。と。あつち。と。川集。と。其場。と。一。事。を。知。る。事。也。と。云。○ 支

考。古今抄。云。春。句。の。句。絶。より。ふ。事。の。あ。つ。ち。不。知。て。あ。つ。ち。と。思

名。乃。大。回。り。と。云。云。川。集。乃。一。章。ハ。カ。の。木。曾。寺。の。偶。作。め。く

卅。句。も。例。の。句。を。思。と。惜。ま。け。り。と。決。定。し。て。平。句。の。難。し。述。れ

れ。と。思。ひ。惜。ま。け。り。と。思。ふ。事。也。と。下。段。より。思。ふ。事。也。と。思。ふ。事

外。の。意。味。と。思。ふ。事。也。と。思。ふ。事。也。と。思。ふ。事。也。と。思。ふ。事。也。と。思

是オ二の證
木名義仲寺也

鎮詞の法あり平此教洞よりいふに却て俳諧の終節にも
 云へきゆや去りゆく舟大に格ハ常蛇の法に似しよして夢遊
 の人におもふべき也と云○路通る芭蕉翁行狀記云元禄十七年
 又月十日も色てききりに父母の青もつらとや結くこの袂を
 氣披ふ成の青もこがりぬいと排尻のこせん方なくしおあし
 又伊賀乃人かこしるをうらむいけりやも是才三の控栗津の菴くま
 ちきりくやきりひなよと云説はらく梅どふ往古木曾寺よ
 翁の艸屋ありん。菴仲乃墓と。うらりせあそどありけり。前々
 引ころんの去來抄抄の句深よと是才四の控木曾塚の舊艸とありん。木曾も
 の翁乃庵の系移去こいふ事也との此の吟よ 本るどあといふ

ありせの菴をよこりけりハ即ち菴也。翁懐海。夫草らに住ぬ。
 夫草死て海。南の岡へ移しん。一人の乃者すしける。や後寛保
 年中。住の庵主咄道和尚。造營しん。今ハ黄檗派乃一字とせ
 ずけり。とぞ寺号ハけり。然して。まゝ後世よつて。佛
 よいともる。庵き事ハけり有。寶曆のけり。年の平。雲裡坊。移
 夫。發起しん。かの石山乃奥の。幻住庵のかつらに何れ。推の樹を
 一りこぞんてをさかい 推わすことばはらび移しうえて。翁の。庵を舊地へ。又わらた
 よ。庵をつらえ。是とのら此幻住庵と呼ホ常も 中あり今翁の石牌
 とあり。ひきんて。是等の。末庵を。し知を。庵き事。え。さて。世小末
 寺といひ。詠さく。翁懐海の。事とあり。是れえ。る多し。今も。世

の時すべし。世唐河りて。けり春の吟も。此唐少の事なりける
 此一件ハ義仲寺の住職より人。雲裡坊と親しく。同君より
 武藏より。りて深川小住。名ハ陶雅梅月坊と号す。陶雅テハ
 りのりす。其證跡ハ。ハ。實に記を。支考り木曾も。此
 偶作し。記を。之疑ひ。ハ。是才五の證。○湖水眺るの題ハ
 つきし。一の師也。略ハ石山ハのハ幻住庵ハ。紫式部ハ源氏書
 乃りし。取より。遥より。一里も。や。余も。山ハの。其ハ乃り。乃
 又。亦。り。わ。り。は。陶雅中。又。源氏の。間。と。云。而。湖。も。ハ
 又。又。源。一。里。か。も。山。の。岨。出。て。舞。臺。有。る。こ。ハ。湖。水。眺。る。の。題。
 けり。風。急。流。す。り。り。け。石。へ。出。く。此。の。あ。の。の。卷。乃。題。向。

うみ。さ。ら。ず。へ。と。い。い。木。曾。寺。ハ。湖。も。亦。く。あ。り。ハ。其。こ。ろ
 ハ。市。店。も。稀。と。い。ハ。湖。も。亦。と。名。く。ハ。其。の。吟。疑。ひ。也。今。ハ
 市。店。亦。く。さ。う。え。る。處。ハ。マ。ハ。湖。も。又。如。中。陶。雅。ハ。行。阿。水。相
 清。ま。り。夢。を。石。山。奥。幻。住。庵。の。作。之。也。全。の。誤。也。予
 六箇の證を出し。訂之。○源。齊。公。け。る。尚。の。事。先。建。の。證。を
 舉。げ。ら。れ。る。也。和。平。少。也。連。致。め。て。也。う。ら。け。ま。ハ。上。よ。そ。云
 抱。享。と。い。ハ。必。し。も。是。也。是。い。き。ま。り。て。け。り。故。ハ。と。い。わ。れ。し。隨
 分。と。く。留。り。結。ぶ。と。是。也。け。り。ま。く。す。由。ハ。と。い。わ。れ。は。う。て
 上。へ。及。ぶ。と。も。あ。ら。わ。れ。及。ら。ぬ。と。云。事。ハ。ま。い。る。と。亦。あ。ら。わ。れ。し。流
 して。げ。向。い。て。面。向。く。思。つ。ま。此。白。大。也。此。跡。ハ。河。の。流

かりと云麻の解少しつ少く面白おとつり予採るべきを
もよ下にわよの人とくを惜みらるるを心少くこと一旬の中
にこれと云ふるをいと喜りわたりぬさすけむ又けるもう然に
最初のわりあて後く支考等と評美してらるおなりと云
知べうらば乃どこのむはとをい最初の又文字なりと後く支
考等と云ふのべと云せし類はあましくあまの此句のけさ
またらひあわら知べうらば大まりのりげあを此句のけさ
予もかりいし是れを心切とす予筆き小也先達の
意押してわらさるる○句意は古今抄云々うく心のけさ
人と云ふ事也惜むわよ此人と云ひうけし命なき遊み

風景をさるるを予はまのりぬをわらさるるを心切とす予筆き小也先達の
意押してわらさるる○句意は古今抄云々うく心のけさ
人と云ふ事也惜むわよ此人と云ひうけし命なき遊み

云是世中の日影と謀の遊揚さるるを心切とす予筆き小也先達の
意押してわらさるる○句意は古今抄云々うく心のけさ
人と云ふ事也惜むわよ此人と云ひうけし命なき遊み

換抄也 林畔 世句を云ふ
推也 初革のうらやうと云ふは一にけさの書と云ふなり

云此句題梅林とあり然もは梅の白く咲く時を以て
是れ好む林和靖と云ふは此の詩も亦一きくつちうふ鶴
中のあきなきや鶴を望まひと訝ふ鮎の句作也

○梅林の題句選少となく其外諸集と又何れも是も好
小好事の人乃詩るるものなり也其注ハ素樸なりて何れなり
○去来抄曰古藏集に此句をあげて先師のよと云ふ
一也是るは梅の句と云ふまゝなるを編し其句追従よ何れなり
秋風ハ洛陽の蜀家より市の中を去り山家へ閑居して
詩弁をたのしむ騷人旅をすもすも渠にむえらるるに
うて風雅閑居の人と思ひ給ふるに作わり先師の句は倭

詣か一評者の心は倭偽りなりそのちさばく招げもれ給ふと
深小歎く命一知るのうと又句解は抱くも其の甚だ
然し子亥一巡の浮海とい格あまなり○筆談曰林逋
隱居孤山常蓄兩鶴縱則飛入雲宵盤旋久復入籠中
逋常泛小艇西湖諸寺有客至童子出應門延客開
籠縱鶴良久逋歸常以鶴飛為驗け故事を好まえて此の
秋風で林和靖のやうに句を乞ふ今日秋風よ招の意也
うりてるのむ梅もさかりふ宋居の月はよはのりけぬも
かの林逋のたのむや何れも去るのう鶴乃又くぬなり也
されよ何れも鶴を望まひなりと真也秋風を林逋に

此ち〜の事〜の心〜亦炭く雪〜
そくすいど 不肖の上よ。ゆせつく〜風雅よ〜
りて 風雅とつよ 諷の洗も〜
〜我と〜ゆ〜ゆ〜
不持人〜

やま〜き〜ゆ〜 莖草

袋 云世句大津（出）道山路終て〜は河や〜字眼也〜

〜のハ〜と〜の〜
林解 此句を〜

説 此註似て非也。大津（出）乃山路終て〜河を〜
〜ゆ〜文義〜
〜例の註者〜

○去来抄曰 胡春云 ず〜山よ〜
巧あり〜
み〜
色り〜
山邊赤人 何々の〜
一帯お〜 堀河院御時 左郎百首 匡房

のつがすめれうか三入新の深きすみわいのものやうら
 大工のりり墨入のゆいひつがすみれもふさうふさう
 のまげ白箱根少の吟と。然もどり笈日記よ。俾芭蕉翁尾張熱
 田連の文章あり。そのうらに云。此達茶宮小かりし。この海草
 新やとてし。並時南に心をうか。白鳥山は標をさして。河や
 かう。萱州とふか。とま。かくのまは。箱根の吟めし。句。熱田
 遠なふ山と。ふさうを眺む。○紫をゆりのまこと。ゆい。いむ
 と。は。ま。ま。成。る。句。意。ハ。袋。に。之。カ。ア。リ
 人ともえぬ春や鏡乃うらの梅

二十

云世白鏡の霜乃梅の白と又うらうらわき我成れ徳でん知人
 ちよさい早鏡鏡のうら梅のむきと鏡身うらうらと都て世の人
 此鏡の面は又いれうらうら梅と又人にもまきとて世よまき
 とふ句うらうら **林** 云世梅乃月やうら梅やひのまかぬ
 月のまひひのりりあまめし人うら梅の梅は清き結文に白
 二兼うえ梅うらうら人にもまきとて安きわや梅よあまめし
 へうらうらまきとて鏡の月乃清きうら金殿樓閣の還やあまめし
 貞享式よ素堂隱士の白梅婆人て梅のふあはしとてふさの
 けきたいけうらうら 蓮二う鏡とて 月やうらうらの言を合してま如の月
 鏡とてうらうら附福はあまめし **林** 此句と出づ。是ハ句意あまめし
 鏡とてうらうら附福はあまめし

蘇翁の蘇旦下

人出スぬほろやかみのうらめし梅

とつふ句いりりる人と初漱のうらめしむる翁の句讀の
うらめし感情の咏嘆の吟をよとと素堂隱居の海をい
しう思へし句讀の具合やして爰に跋識せしらんや
さるばるうりる翁のうらめしやういりりる翁をや
漱の上りるうらめしやういりりる翁をや
に讀は翁一首をうらめし息をよむりらめしうらめし
さやにうらめしを咏歎もこうららると古人も海をうらめし
世句のうらめしうらめし人出スぬほろやとゆへ讀のうらめし梅と二口

よすし句讀也。かよふよらば。句の意をうらめしと。わりかよふ
素堂もこうららると。翁一首をうらめし。能く考へ味を
三考するふ。俳句に。句讀の名目。古よりなきも也。全く支考
作りし。道を私ふの一助もとせし。よ。考好し。世の好ま
の人。是考にす。うらめし。あつと。うらめし。法格を作。翁も支
考を。的とする。うらめし。うらめし。千梅論せし。うらめし。弘し
夫考し。喜する。とふ。支考。世句のや。うらめし。色ぢや
い。古法に。中のや也。と。翁。支。あ。うらめし。句讀の名
目。改會せし。後。うらめし。句讀の。名も。うらめし。と。名。己
の。罪。を。うらめし。成。○世句意は。うらめし。人出スぬほろ。讀

のうらふ小鏡つけし梅とあけく女し鏡のあけえくもあま
 しい女人少色知くもて澹しつらく口惜しむとやも死名の
 けとせ比し一の吟や戸わにそ乃心は杉梅よりも一層々清潔
 せしむを又たの鏡の裏くわ梅の人を分春よりとの
 もす由自己よ推てふふもふむつしきや教の毒もしハ使
 る不常也○鏡の裏に梅梅のすハ原信の家集かもしの
 みとよもふの介かも有るなりまゝ伊勢の家集の鏡の
 小鶴のやを誘つけえふつらふへかもあふり折らん
 せしむあつの人をさるる今後何ややけかやを
 操くせしむらめらつら梅のこのまゝかまらるるし
 鏡裏

のちをえりしやりしはあけり又梅苑鏡とて古物よの
 小梅苑の形さしも有るのみく後明がりて古鏡よのけ
 ららかや物あもつらてなく雪雀

解

但下巻 神日記おむむり鳴わし妙にあつた梅而公の初と

とちやまらんかとりんるこりりえ再兼乃於骨むよう梅

説 笈日記 下巻 云 赤中や物うとつらふもくま
 タまを物あもつら瓜のま

此二句ハ西の弁小心性とてまゝとつらふを類あく人ハ
 やり物 雲雀のけりしやあまの
 是て古物なり 梅家ふいふとあつた恒例也 神日記らふハ

軽向流少納言より詠り句はきい撰集抄より書り撰集抄
 小之中勢元補の扇の事二首より詠ふとて下よけ扇婦たり勝小
 定りとてそ非のゆかりき扇もいむのわらりの深山末の流し
 ていそりそえ人ふかりりとりけ細よりあかり一句は神也
 句もあは口傳とて文へ一は師流也と云○句選よけ句の流し
 一日はむお書て淋しやらすかりりえいりけ句意別なるや
 俗人ふおと下と記たり(説)此句意の前書めくつかりりし翌ハ
 くこつひつてあもさすぬあつととていさへ句やあつとて言は
 寛優よえりり只意のわりりの深山末の淋しきとていさへ正
 直なる也一又日いむお書ていあすかりりといさへ名へけてい

の日もお書ぬふりまごあつとていさへあすかりりといさへ
 との句意し予拙ずたに日いむお書とてむつとて風骨ひきりぬ
 最初の吟句も一はよ淋しとて花のわりりと調練し一は幽玄の
 風骨より翁の句が茶葉の事と有るべしとてや操のりりて今参
 へて母場翁のほもいし愚案の事とありとていさへ事多岐とれ
 び略と○今市店へ瓜の下にいさへ捨の事多くいあすかりりといさへ
 也捨案とまよげりといあすひの本の事いさへいさへあすかりり

え日い田毎の日こそ急しり

(説)此句諸集よえ日みと出せり誤り信及の鶏山又のりり

彼と新ちるに。さうらう海。統めくくそめ小。河を家りて。徳を
 暢くしらんや。世ふん。友舎いあくと。清ふ人。雀ふを。一。家
 法。托をすして。風凍を感深。一。近代風雅の人。我言を乃。一。互
 よらふ。一。家。一。つ。み。み。そ。ま。く。り。を。毎。の。託。し。雀。と。あ。り。善。と
 む。と。い。ふ。づ。わ。一。風。雅。却。て。賦。節。の。世。の。家。好。一。と。意。味。を。い
 妙。え。新。無。為。の。徳。と。う。候。し。る。翁。の。い。ま。は。し。り。か。候。を。海
 と。候。し。て。の。近代。ゆ。き。を。導。く。の。う。し。り。の。い。ま。は。し。り。の。い。ま
 今。を。為。の。候。と。述。ふ。う。し。り。の。い。ま。は。し。り。の。い。ま

春部下終
 以上 十有九章

蕉翁發句說叢大全卷第二終

